

Title	活動の始まりの頃 : 全国精神保健福祉相談員会
Author(s)	助川, 征雄
Citation	こころの健康, 第 25 卷 1 号 : 71-76
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=2528
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

シリーズ 活動の始まりの頃 ～ 全国精神保健福祉相談員会 ～

聖学院大学 人間福祉学科 助川征雄

1 はじめに

本稿では、全国精神保健福祉相談員会(以下、「全精相」と略)の活動の始まりの頃について概括する。ここでは、主に筆者の体験、手持ち資料、それに、全精相の第3期会長を務められた埜和徳氏が最近まとめられた「資料・(全国精神保健福祉業務研修会) 過去開催状況」などをベースにしている。

2 「精神保健福祉相談員会」のはじまり

全精相が発足したのは、1982(昭和57)年7月10日のことで、東京都港区全特会館で開催された「全国精神保健福祉相談員会結成大会」が組織としての始まりである。結成大会の内容は、次の通りである。

全国精神保健福祉相談員会 結成大会 (昭和57年7月10～11日)

記念講演	<1日目>9:30～17:30 受付 主催者挨拶 経過報告 来賓祝辞 厚生省精神衛生課 今田 寛睦 東京都衛生局 服部 大明 日本PSW協会 柏木 昭 全国精神障害者家族会連合会 滝沢武久
プログラム	◎記念講演 「精神衛生相談員に期待するもの」 大阪府衛生部公衆衛生課長 矢内 純吉
内容	◎結成総会
来賓等	◎各地の精神衛生活動の現状と課題(Ⅰ) ①新潟県衛生部公衆衛生課 山口 哲雄 ②横浜市港南保健所 池田 路子 ③東京都町田保健所 山中 房子 ④愛知県刈谷保健所 藤村 恵子 ◎懇親会17:30～19:30

	<p><2日目> 9:00~12:00</p> <p>◎各地の精神衛生活動の現状と課題（Ⅱ）</p> <p>①大阪府吹田保健所千里支所 殿村 寿敏</p> <p>②神戸市北保健所 美藤 早苗</p> <p>◎シンポジウム</p> <p>「精神衛生相談員会を発足させることの意義と今後の課題」</p> <p>司会 神奈川県鎌倉保健所 岩崎 七四六</p> <p>助言者 日本社会事業大学教授 小松源助</p> <p>発言者</p> <p>①神奈川県相模原保健所 助川 征雄 「保健所の立場から」</p> <p>②千葉県精神衛生センター 佐々木 光昭 「精新衛生センターの立場から」</p> <p>③川崎市衛生局保健指導課 「主管課の立場から」</p>
--	--

結成の準備を担ったのは、主として、厚生科学研究・岡上和雄班(後述)のメンバーで、三代浩肆氏(初代会長)をはじめとする、神奈川県や川崎市の精神衛生相談員の人達であった。その中には、二代目会長として、全精相の発展と日本における精神障がい者サポートの基盤づくりに長い間リーダーシップを発揮した、天野宗和氏(元・埼玉県立精神保健福祉センター精神保健福祉部長、現・東日本国際大学教授)も加わっていた。

結成大会は2日にわたって開催され、およそ150人の参加者があったと思われる。来賓者としては、厚生省から今田寛陸氏(元・国立精神・神経センター精神保健研究所長)や柏木昭氏(現・日本精神保健福祉士協会名誉会長)などが招かれた。また、当時、大阪において公衆衛生課長としてリーダーシップを発揮されていた矢内純吉先生に、「精神衛生相談員に期待するもの」というテーマで記念講演をお願いし、多くの示唆と励ましをいただいた。

2日間にわたり、各地(新潟、横浜、東京、愛知、大阪、神戸)の精神衛生活動の現状と課題についての報告と経験交流が行われた。2日目の「シンポジウム～精神衛生相談員会を発足させることの意義と今後の課題」には、保健所、精神衛生センター、担当課(本課)の代表がシンポジストとして選ばれ、私は保健所代表として参加した。ここでは、相模原保健所の精神衛生相談員の立場から、日々、入院相談に追われ、地域支援やその体制づくりが滞りがちである現状報告と、それらを打開するための組織としての「全精相」への期待を述べた。あわせて、「Y問題(後述)」を主体的に受けとめる必要性と、このような事態を招かないための法・制度などの構造的な改革の必要性、それらの議論や活動の場としての「全精相」への期待などを表明した。これらに対し、小松源助先生(元・大正大学教授)が助言者として参加され、シンポジウムを意義深いものにしてくださった。

なお、大谷藤郎厚生省医務局長 伊東フヂエ日本精神科看護技術協会長、日本精神病院協会千葉県支部、同和会千葉病院医局、千葉県保健所長会、千葉県保健所予防課長会、千葉県職員検査技師会からそれぞれ祝電をいただいた。

3 発足の背景

(1) 大谷籐郎先生と故岡上和雄先生（厚生科学研究）の功績

まず、全精相発足の功労者は大谷籐郎先生であると申し上げなければならない。先生は長く公衆衛生行政に従事し、公衆衛生局長、財団法人・日本藤楓協会理事長などを歴任された。その間、ハンセン氏病や精神障がい者などの人権回復に尽力、退官後も精神障がい者の地域社会復帰運動など、疾病・障がい差別撤廃の人権運動にかかわり、平成5年には、社会医学・公衆衛生分野におけるノーベル賞といわれるレオン・ベルナル賞を受賞された。また、医療保健福祉などの専門教育領域でも多大な功績を残された。本会との関係では、保健所における地域精神衛生活動の混沌とした出発当時の状況の中で、方向付けに尽力された。同時に、長く全精相の最高顧問として、その取り組みを見守り、励まし、大きな後ろ盾となってくださった。

当時、保健所における精神衛生事業に関する厚生科学研究を主催していた、岡上和雄先生の労もまた多大なるものがあつた。この研究を通じて、保健所の精神衛生相談員(保健師やPSW)が直面していた「構造的な課題」(業務指針の確立、マンパワーの確保、待遇改善など)解決のために第一線の相談員と共に模索をはじめていたのである。

岡上先生は、昭和46年に川崎市社会復帰医療センターの初代所長を勤められ、全国に先駆けて精神障がい者の社会復帰のための地平を開拓され、その後、国立精神保健研究所社会精神衛生部長、全国精神障害者家族会連合会精神保健研究所、日本社会事業大学、中央大学などでの取り組みを通じ、終生、精神障がい者の社会参加や就労支援、さらに社会福祉教育にも力をいれられたことはよく知られている。



<岡上先生を囲んで全精相役員と、1986(昭和61)年6月7日 箱根にて>

(2) 精神衛生法の一部改正と精神衛生相談員の配置

精神衛生法は、昭和 40 (1965) 年に一部改正された。主な改正要点は次の通りである。保健所を精神衛生の第一線機関とし、相談の相談窓口を設けたこと。また、各都道府県に精神衛生センター（現・精神保健福祉センター）を設置し（当時は設置努力義務）、保健所をバックアップする専門機関と位置づけたこと。さらに、通院医療費公費負担制度（現・自立支援医療費制度）を新設し、外来通院を奨励したことなどである。これらをもって、日本型の精神障がい者のための地域ケアの第一歩を歩みだしたのである。

同時に、厚生省（現・厚生労働省）は保健師に対し、「精神衛生相談員資格取得講習会」を開き、専任相談員としての資格取得と配置強化を図った。

多くの都道府県では、保健師が専任の精神保健相談員に任ぜられた。しかし、神奈川県、川崎市、大阪府、新潟県などは社会福祉系職員（以下、「PSW」と略）を精神衛生相談員（現・精神保健福祉相談員）として配置した。やがて、宮城県（保健婦と嘱託医による訪問活動）、群馬県（生活臨床理論をベースにした実践）、高知県（駐在保健婦活動）、神奈川県（PSWを中心とした相談・訪問支援、社会復帰グループ活動、家族教室など）等でのとりくみが次第に知られるようになっていった。

保健所は 1947 (昭和 22) 年の保健所法改正により、住民の健康を支える「公衆衛生機関」として位置付けられた。その後、1965 (昭和 40) 年に、精神衛生行政の第一線機関に位置付けられた。しかし、近年は 1994 (平成 6) 年の保健所法の改正（地域保健法の制定）や行政改革により削減や再編が進んでいる。因みに、全国の保健所数は 1993 (平成 5) 年の 852 か所をピークに、2009 年 (平成 21) 年 4 月現在 510 か所に減少している。なお、全国精神保健福祉相談員会の調査によると、1990 年代には保健所の専任精神保健福祉相談員数に占める精神保健福祉士の数が約 60% に達したことがあった。しかし、その後、保健師（精神保健福祉士有資格者を含む）の専任者が相当増えていると思われる。

(3) 当時の精神衛生相談活動

1970 年代の保健所における精神衛生相談は入院相談が主で多忙を極めた。昭和 39 年 (1964) 年におきた「ライシャワー事件」の影響であった。アメリカの駐日大使が統合失調症の青年に襲われたこの事件は、世論を二分した。「精神障がい者野放し論」と「地域ケア推進論」である。精神障がい者を危険視し、すべて警察に登録すべしという強硬論もとびだした。しかし、欧米先進国においては、向精神薬の効果や人権擁護の機運を踏まえ、開放治療や地域ケアが次第に時流となってきたのである。結局、国は、保健所や精神衛生センターを拠点とする日本型の地域ケアの体制づくりを進めることにしたが、入院治療先行の状況に対しては、有効な方策を打ち出せなかったのである。

後に、保健所における精神衛生活動やその担当者は、主に公立精神科病院のワーカー「仲間」から、「保健所精神衛生相談員が当時していたことは、精神科病院への“ぶっこみ屋（入院斡旋屋）”にすぎない」と手厳しい批評を受けることになる。しかし、保健所では、ミニ

デイケアや家族教室開催などを通じて地域ケアを試行しはじめていたし、精神科病院では、医療の改善やリハビリテーションにトライしていた人達もいたのである。当時、入院中心で閉塞的な状況を変えていかなければならないという問題意識は全国的に芽生えていたといえることができる。日本精神医学ソーシャルワーカー協会(現・日本精神保健福祉士協会。以下「日本 P S W 協会」と略)は少数集団ではあったが、「精神衛生相談員」の配置をふまえ、日本医療社会事業協会とともに「身分資格化」のための陳情をはじめていた。しかし、民間精神科病院側からの資格制度化推進に関する提言に対しては「民間病院へのワーカー配置は重要な問題ではない」と活動方針から切り捨ててしまったと伝えられている。互いに第一線の担当者をねぎらうはずの組織運営が不統一で教条的な部分があったことは否めない。そういう傾向は、特に、相対的には労働条件のよかった公務員ワーカー側に多かったように思う。相対的に「理想論」を掲げる余裕があったということである。ただ、これらに起因する感情的な反発は、残念ながらその後も長く尾を引き、それらが「Y問題」後の協会運営の混乱や、全精相の結成の情緒的な部分を醸成したといえるのである。

結局、わが国の「精神障がい者対策」は社会防衛的なトンネルをなかなか抜け出せなかった。地域住民や家族からの入院要請の多い中で、措置業務(法に基づく強制的な入院支援)を余儀なくされたのである。措置入院率は今日では全体の約1%以下であるが、当時の「措置入院率」は高く、30数%に上ったこともある。後に禁止されたが、医学的理由によるのではなく、経済的理由によって入院が認められる「経済措置」が横行したのである。それらの状況の中で、朝日新聞記者がアルコール依存症者に化けて民間精神科病院に潜入しその実態を暴露した「ルポ精神病棟」、「烏山病院闘争」、「Y問題」、「生活臨床論争と地域精神医学会の崩壊」など、歴史に残る初期の業務のあり方や人権権利擁護めぐりせめぎあいがなされた。ただ、この事件は、1982(昭和57)年の全精相結成におきなインパクトを与えたといえることができる。はからずも、この事件が、当時の保健所等において精神衛生相談員(保健師や P S W)が直面していた「構造的な課題」を世に問う契機となったからである。

なお、当時のことでもうひとつ忘れてはならないことがある。それは「クラーク勧告」である。1968(昭和43)年、厚生省の要請により、WHOのフェローとして英国の精神科医であるクラーク博士(D H, Clark)が来日し、当時としては革新的な「クラーク勧告」を提出した。その中には、精神科医療の改善、地域ケアの促進、専門職種の養成と資格化などが盛り込まれていた。しかし、当時の厚生省の担当者は「斜陽の英国から学ぶものはない」とその提言を一蹴したと伝えられている。しかし、博士はその後7度来日され、多くの精神科医やソーシャルワーカーなどをケンブリッジ州立フルボーン病院や同リハビリテーションセンター(C P R S)に受け入れ、研修の機会を設けてくださった。私もその恩恵に浴した一人であるが、転換期の治療共同体(Therapeutic Community)やデイケア、グループホーム活動などの地域ケアのための活動にふれる貴重な機会であった。博士はご存命で、2010年8月には90歳の誕生日を迎えられる。

ともあれ、その後、全精相は途切れることなく「全国精神保健福祉業務研修会」を継承し今日に至っている。また、実践書刊行や各地で研究交流集会を開催するなどして会員を支え、フォーマルなサポート基盤づくりのための政策提言などに、一定の役割と社会的信頼を得ている。

4 まとめ

以上、全国精神保健福祉相談員会の活動の始まりの頃の事情の概略をまとめた。まとめるに当たっては出来る限り客観的な記述を心がけた。ただ、今回は、始まりの頃の核心部分である故岡上先生の厚生科学研究班の取り組み部分を明らかにすることが出来なかったことが残念である。それらのことは、是非、今後の関係者による寄稿のチャンスに期待したい。事実誤認がないことを願うが、齟齬の責任はすべて私にある。

本稿を閉じるにあたり、日本PSW協会と全精相が、それぞれが蓄積してきた経験知をさらに共有し、あらたな専門支援をめざして組織的な強い絆を結ばれることを切に願う。あわせて、全精相の組織化や運営に貢献された故小松源助先生、故岡上和雄先生、および故林幸夫氏らに深甚なる謝意を表し、ご冥福をお祈りしたい。

参考文献

- 吉川武彦，竹島 正：これからの精神保健：南山堂， 2001
日本精神保健福祉士協会監修；日本精神保健福祉士協会 40 年史：日本精神保健福祉士協会 2004
助川征雄；「共同幻想ではなく真の始まりを」特集「法人化と協会40年の歩みー精神保健福祉」V o 1、35-N o 2：日本精神保健福祉士協会 2004
助川征雄；第6章 地域生活支援 新精神医学ソーシャルワーク p p 111：岩崎学術出版社 2002
柏木 昭他編；「これからの精神保健福祉ー精神保健福祉士ハンドブック（第4版）：へるす出版 2009
埴 和徳：資料・全国精神保健福祉相談員会・過去の開催経過 2009